

平成 24 年度 海外臨床薬学研修報告書

「医療現場における薬剤師として米国薬剤師から学ぶべきこと」

研修期間：平成 24 年 6 月 10 日～6 月 24 日

研修先：サンフォード大学薬学部

薬学部薬学科 6 年

070973226

黒川 瑠璃子

2012年6月10日から24日の14日間、アラバマ州サンフォード大学で行われた海外臨床薬学研修に参加した。私はアメリカと日本での臨床現場における薬剤師の違い、また病院実習で薬剤師外来に興味を持ち、患者教育という点でアメリカの医療を学びたいと思い、参加した。10人が3つのグループに分かれて、午前中はグループ毎にそれぞれの施設に行き実習を行った。また、午後は講義や症例検討会に参加した。私のグループは St. Vincent's Hospital ER(救命救急センター)、FMS Pharmacy(糖尿病教室)、St. Vincent's East Hospital(教育チーム)、Children's Hospital(小児病院)、Drug Information Center(学内DIセンター)、Christ Health Center(医院+歯科+調剤薬局)、Jefferson County Dept. of Health(保健所:糖尿病外来)、Homewood Pharmacy(調剤薬局)、Southern Medical Services(TPN等の混注を専門に扱う薬局)に訪問し、実習させていただいた。海外研修の前には、私の中で、アメリカの医療は素晴らしく、日本はその素晴らしい医療を真似ている、という印象があった。

【病院での取り組み】

St. Vincent's Hospital の ER では、薬剤師が介入し、薬物治療に参加していた。学生が教員に対して2人付き、実習を行っていた。私はその中で、1人の学生と共に患者の部屋に行き、初回面談に立ち会った。日本では、ERに実習生がいることはない。そして、実習生が1人で患者の部屋へ行き、話をする機会もあまりなかった。その学生はまだ実習を初めて1か月あまりだったが、1人でインタビューに行き、患者のカルテを見て、患者の問題を探していた。薬学生の立場が日本とは違い、薬剤師は実習生であっても信頼されていると感じた。ERに薬剤師がいることは、アメリカでも稀であったが、日本よりも広い職能、そして確立された薬剤師としての立場、医療現場における信頼を感じた。

また、日本では機械化が進み、病院では電子カルテが主流であるが、アメリカの病院では紙カルテが主流で、学生はカルテを見て問題を探し、独自のワークシートに書きこみ、それを教員と共にフィードバックして患者の問題を探していた。教員と学生のコミュニケーションの仕方にも日本と差があると感じた。学生が積極的に患者の問題点を探し、治療に介入しようとしていた。また、St. Vincent's East Hospital や Children's Hospital では医師のレジデント、薬学生がチームに入り、学生同士と一緒にチームとなって患者のラウンドに行くというスタイルで実習に参加していた。ここでも薬学生の実習生の立場の違いやモチベーションの高さを感じた。学生であっても1人の医療人として誇りを持って学んでいる。このモチベーションの高さは私たちも学ばなければならないと思い、考えさせられた。

アメリカの薬剤師も昔は医師ら医療スタッフと信頼関係が築けておらず、築くのに時間はかかったという話を聞いた。薬剤師が自分のやるべきことをやり、実績を積んでだんだんと時間をかけて信頼されてきた。そのことを聞いて、アメリカも日本も薬剤師の能力にはそれほど差はないが、実績の差、そして信頼関係の差はあり、今後日本の薬剤師もその活躍により、信頼関係を築くことができると実感した。

【薬局での取り組み】

今回調剤薬局には3カ所訪問させていただいたが、その中でも FMS Pharmacy での糖尿病教室

が印象的だった。その糖尿病教室は、薬剤師、薬学生各1人、患者4名と私たちグループ4人という大人数で行われた。私たちはただ見学するのではなく、患者さんの間に入れてもらい、1人の医療人として参加させていただいた。患者さんはそれぞれ糖尿病になって何年も経つがコントロール不良な人や診断されたばかりの人など様々な状態だった。日本の実務実習で糖尿病教室に参加した時は、薬剤師はまずビデオを見せて糖尿病についての知識を与え、インスリンや糖尿病治療薬についての使い方を教えるというものだった。しかし、その教室では、糖尿病の病識についてまず薬剤師が患者に問い、患者同士がディスカッションすることによって患者同士が共感し、共にアドヒアランスを確立するものであった。薬剤師が1からすべて教えるのではなく、患者同士が教え合う。そして、それに学生を参加させることにより、薬学教育に生かす。この糖尿病教室への参加は私にとって非常に印象深く、患者教育の重要性を改めて認識し、患者教育の在り方について考えさせられた。また、今後の自分の薬剤師像についても考えさせられるものとなった。さらに、Christ Health Centerのように、クリニックと歯科と調剤薬局が同じ施設に入っている施設もあり、患者にとって重複投与がなく、また利便性もあり良い取り組みであると感じた。

【保健所での薬剤師の取り組み】

Jefferson County Dept. of Health は保健所にクリニックが入っているような施設で、主に糖尿病外来を行っていた。患者は保険を持つ人、持たない人様々だったが、病識がない人が多かった。レジデントと実習生に付き、外来の患者さんの医師とのチーム医療に参加した。薬学生は他の施設同様、それぞれチェックシートに問題点を書き出し、それについてインタビューを行っていた。そして、薬学生が医師から直接指導をしてもらっていた。このような実習環境を大変羨ましく思った。そしてここでも薬剤師への信頼関係が見受けられた。また、災害時医療について講義を受け、アメリカもハリケーンのような自然災害から学び、対策を行っていた。これは日本の地震や津波に対する対策とも似ており、互いに災害から学ぶ姿勢は同じであると感じた。

【最後に】

アメリカの薬学生はモチベーションが高い。これは日本の薬学生も学ぶべきところである。アメリカの医療においても、薬剤師の誇りを持った仕事ぶりは学ぶべきところが多く、医師や他医療スタッフとの関係においてもやはり学ぶべきである。しかし、日本の医療にも優れているところは沢山ある。皆保険制度は医療費増加の問題にもなっているが、すべての国民が平等に医療を受けられる制度である。また、お薬手帳や災害伝言掲示板など災害から学んでできた機能も整備されている。今後の医療人として、私たちはアメリカより良い点を見て学び、それを取り入れることは重要だと考える。また、日本独自の良いシステムは今後も改良して生かすべきだと考える。

来年から社会に出て、1人の薬剤師として働くにあたり、今回の研修で学んだことは私にとって大変良い機会となり、自分がどのような薬剤師として働きたいのか考えさせられた研修であった。今回のような貴重な機会をいただき、大変感謝している。